



苦肉の作 画

川崎ゆき

この絵の師匠、いつも苦しそうにしている。苦虫をかみつぶしたような。しかし師匠は虫を食べる趣味はない。渋柿を食べたような顔では、少し滑稽だ。

その弟子、師匠に渋柿を食べさせたいと思ったわけではないが、師匠宅への道で柿を一つもいだ。丁度階段を上ったところに柿の木が下にあり、枝に手が届いたためだ。この柿が渋柿であるかどうかは分からない。

絵師の庭にしては荒れており、ススキが縄張りを広げたのか、背も高く、九尾の狐が箒のような尻尾を立てているように見える。

「苦しいときほど良い絵が画ける」

「そうなのですか」

最近絵筆を持つての指導より、会話の方が多い。ある程度基本をマスターしたためだろう。この師匠の絵には種絵があり、その肉筆本が何冊もある。画集のようなものだが、先代から受け継いだもので、その絵をお手本にして画き覚える。

「絵は苦しいときに限る。しかし、これは苦しい。調子の良いときの絵はつまらん。そのときはいいが、後で見ると、凡作じゃ」

「それは苦勞して画いた絵に愛着が湧くだけじゃないのですか」

「だけ、か」

「それだけじゃないでしょうが、思いも深いと」

「そうではなく、苦肉の作画というのがある」

「苦肉の策じゃないのですか」

「策は意図したものじゃが、そうではない。調子の悪いときは絵など画きとうないし、画き出そうとしても一点も墨を付けられぬ。画くものがないというより、画く気がないのじゃろうな。しかし、頼まれた絵は画かないといけない。食うためにはな。だから、無理をしてでも画く。調子の悪いときにも」

「それで苦肉の策で、何かいいものができるわけですか」

「苦肉の作画は、策がない。従って、何をどう画くのかは決まらん。画くものが決まらんに画く。これが意外と良いのができる。思わぬ絵が画けたりする。しかし、その間、非常に辛いけど、画き出せば何とかなる」

「今もそんな感じですか」

「それを狙ったわけではないが、絵はもう飽いた。これ以上画いてもそれ以上の深みもない」

「凄いところに来ておられるのですね」

「いやいや、ネタが切れただけじゃ。しかし、この種本に加えられそうな新作が画けたりする。それらはいずれ君に渡す。我が流派を残すためにな」

「はい、精進します」

「精進ではなく、水が涸れてからが勝負でな。画くものが枯れてから本当の絵が画けるようになる」

「枯山水のようなものですね」

「君はまだ、我が流派に伝わる種絵を真似なさい。まだ、残っておるだろ」

「はい、では、あちらで模写します」

「ああ、私が教えなくても、その種本が教えてくれようて」

師匠は相変わらず苦しそうな顔をしている。頼まれた絵が画けないのだろう。

弟子は師匠の部屋を出るとき、柿を差し出した。

「それは渋柿じゃ。階段のところの柿じゃろ」

「そうです」

「まあ、いい、食べる」

「え」

「ついでに苦そうな虫を持ってこい」

「さらに苦しくなりますよ」

「苦肉の作画に役立つ」

「あ、はい」

「苦しくて、絵が荒れる。これは調子の良いときには出せない筆使いとなり、筆先の飛び、蹴り、跳ね具合に妙味が出る」

「苦虫は無理ですが、柿をもう一つ取ってきます」

「ああ、そうしてくれ」

弟子が部屋を出たあと、師匠はその柿を囓った。

「しまった」

師匠の顔から苦しそうな表情は消えていた。

甘柿だったようだ。

了